

修士論文(要旨)

2026 年 1 月

B・JAS コーパスを用いた中国人日本語学習者の誤用と自己修復の縦断的分析
ー留学経験の有無に着目してー

指導 齋藤 伸子 教授

国際学術研究科
国際学術専攻
言語教育実践研究学位プログラム
224J1002
王 心澈

Master's Thesis(Abstract)

January 2026

Self-Repair in Chinese Learners of Japanese:
A Longitudinal Analysis of Study-Abroad Effects Using the B-JAS Corpus

XINCHE WANG

224J1002

Master of Arts Program in Linguistics and Language Education

Master's Program in International Studies

International Graduate School of Advanced Studies

J. F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Nobuko Saito

目次

第1章	研究背景及び目的.....	1
1.1	研究背景.....	1
1.2	研究目的.....	2
第2章	先行研究.....	3
2.1	「自己修復」の定義.....	3
2.2	誤用と誤用訂正に関する研究.....	3
2.3	留学と日本語使用・語用論的能力.....	4
2.4	先行研究のまとめと本研究の課題.....	4
第3章	研究方法.....	6
3.1	使用コーパスとデータ概要.....	6
3.2	対象話者の選定.....	6
3.3	分析区分.....	6
3.4	修復事例の抽出と分類基準.....	7
3.5	分析手順.....	8
第4章	分析結果.....	9
4.1	結果の概要.....	9
4.2	学習者 A の区間別の変化.....	9
4.2.1	学習者 A の文法における自己修復の形式的特徴.....	12
4.3	学習者 B の区間別の変化.....	13
4.3.1	学習者 B の文法における自己修復の形式的特徴.....	16
4.4	修復されやすい誤用・修復されにくい誤用.....	17
4.5	学習者 A と B の比較分析.....	18
4.5.1	誤用率・自己修復率の違い.....	18
4.5.2	留学時期前後での学習者 A の変化.....	19
第5章	考察.....	20
5.1	留学経験と自己修復行動の相関.....	20
5.2	自己修復の対象と学習者の言語意識の変容.....	21
5.3	コロケーションへの気づき.....	22
5.4	誤用と自己修復から見る学習者 A・B の発達像.....	22
第6章	結論.....	24
6.1	研究のまとめ.....	24
6.2	本研究から見えてきたこと.....	24
6.3	日本語教育への示唆.....	24
6.4	本研究の限界と今後の課題.....	25

参考文献

資料

要旨

本研究は、中国人日本語学習者の会話における誤用と自己修復行動を対象とし、学習環境の違い、とりわけ留学経験の有無が、学習者の言語運用と自己モニタリングのあり方にどのような影響を及ぼすのかを、縦断的会話データに基づいて明らかにすることを目的とする。自己修復は、単なる誤り訂正ではなく、学習者が自らの発話を点検し、相手にとって理解しやすい形へと即時的に調整する相互行為的行動であり、学習者の自律的な言語運用能力や語用論的能力の発達を捉える上で極めて重要な指標である。しかし、日本語教育研究においては、誤用分析や留学効果に関する研究が多数存在する一方で、自己修復に焦点を当て、その量的・質的变化を同一学習者の会話データから縦断的に検討した研究はきわめて限られている。

本研究では、北京日本語学習者縦断コーパス B-JAS を用いた。B-JAS は中国人大学生 17 名を対象として 4 年間にわたり収集された学習者コーパスであり、その中から習熟度テストのデータが全期間にわたって揃っており、4 年間にわたる日本語能力の伸長を客観的に確認できる 2 名を抽出した。対象者のうち 1 名（学習者 A）は学習途中で日本留学を経験し、もう 1 名（学習者 B）は母国での学習を継続している。両者の自由会話データを、留学前・留学中・留学後（または同時期）の三段階に区分し、誤用および自己修復行動の推移を比較した。誤用は吉川（1997）の分類を参照し、①語彙の選択、②文法、③音声、④待遇表現、⑤コロケーションの五つに分類した上で、誤用頻度および誤用に占める自己修復の割合を算出した。さらに、修復の形式と対象についても記述的に分析した。

分析の結果、留学経験を有する学習者 A では、留学後に文法・語彙・音声といった形式的領域において誤用率が大きく低下するだけでなく、自己修復率が顕著に上昇することが明らかとなった。さらに注目すべき点として、自己修復の対象が、学習初期には音声や形態的誤りに集中していたのに対し、留学経験を経て、待遇表現や談話構造といった語用論的・談話的側面へと拡張していく過程が確認された。一方、留学経験を有さない学習者 B では、誤用率は全体として大きな変化を示さず、自己修復も助詞や活用など基礎的な形式調整にとどまる傾向が見られた。また、誤用の種類によって修復されやすさに明確な差があり、文法誤用は比較的修復されやすい一方で、コロケーションの誤用はほとんど自己修復の対象とならないことが示された。

以上の結果から、自己修復は誤用の減少に付随する副次的現象ではなく、学習者が発話を運用する際の意識や注意の向け方とも密接に関連していることが示唆された。特に留学経験を有する学習者では、日本語使用の場面や交流する相手が広がることに伴い、語用論的側面への配慮が強まり、自己修復の対象が高度化していく過程が観察された。

本研究は対象者数が少なく、ケーススタディとしての性格を有するため、結果の一般化には慎重さが求められる。しかし、縦断的な会話データに基づき、誤用と自己修復を同時に捉え、留学経験が自己修復の質的高度化と結びつく過程を具体的に示した点に、本研究の独自性と意義がある。今後は対象者やデータ量を拡大し、母語背景や学習環境の違いによって、どの領域で自己修復が生じやすいのかを比較検討する研究が求められる。本研究の知見が、日本語教育において学習者の自律的モニタリング能力をどのように支援するかを考える一助となることを期待する。

参考文献

〈和文〉

- E. A. シェグロフ・G. ジェファソン・H. サックス (2010) 西阪仰 [訳] 「会話における修復の組織—自己訂正の優先性」『会話分析基本論集—順番交替と修復の組織』世界思想社.155-246
- 今中麻祐子(2015).「中国語、日本語の母語話者と非母語話者の会話における修復行為について」.『英語学英米文学論集』.41.43-62
- 大野陽子・松岡知津子(2012).「留学経験の有無は、日本語学習者の日本語使用にどのような影響を与えるのだろうか?—韓国人日本語学習者の接続表現の使用をめぐって—」.『三重大学国際交流センター紀要』.7, 1-12.
- 許夏珮 (1997) 「中・上級台湾日本語学習者による「テイル」の習得に関する横断研究」『日本語教育』95:37-48.
- 許夏玲(2024).「中国人日本語学習者の日本語会話にみる「言い直し」の情報再構成」.『東京学芸大学紀要 機構』.75.1-10
- 串田秀也・平本毅・林誠 (2017) 『会話分析入門』.勁草書房
- ケーオキッサダン・パッチャラポーン(2020).「日本語学習者の留学後の日本語能力及び異文化間 コミュニケーション能力に対する自己評価 —タイの日本語教育現場への応用—」.『東北大学大学院 国際文化研究科論集』.第三十号
- 迫田久美子・細井陽子(2020).「異なった学習環境における日本語使用の正確さと複雑さ—日本語学習者コーパス (I-JAS) の分析に基づいて—」.『計量国語学』.32 巻 7 号
- 鹿浦佳子、田嶋香織、土田恵未(2022)「留学生と日本人との日本語会話の誤用・使用調査」.『日本語教育論集20号』
- 島田かおり(2011).「日本語学習者の誤用分析：中国語母語話者の事例研究」.『山口国文』.34.96-106
- 宋栄芬(2012).「日本語勉強における中国語話者の「母語干渉」について—構造的比較からアプローチ—」.『近畿医療福祉大学紀要』.13.17-23
- 東保登紀代 (2006) 「中上級日本語学習者の会話における誤用：録音会話の誤用と学習者の自己訂正」『多文化社会と留学生交流：大阪大学留学生センター研究論集』.10, p. 73-82 https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/50752/MESE_10_073.pdf
- 徳本浩子(2018).「初級日本語学習者の語彙の誤用傾向 —オンライン語彙学習教材作成を目指して—」.『名古屋外国語大学論集』.3.153-170
- 千々岩宏晃(2019).「「記憶の心的述語」によって自己修復される際の語の選択に関する分析」.『日本語・日本文化研究』.29.214-227
- 張玲玲(2016)「言語的修復行動に関する語用論的研究：中国語との比較を通して」.平成25年度博士学位論文 北海道大学大学院文学研究科
- 永山友子(1997)「日本語母語話者と日本語非母語話者の会話における日本語非母語話者へのフィードバック：会話におけるrepairの相互作用をめぐって」『筑波応用言語学研究』4.41-54

- 布施悠子・鈴木靖代(2021)「対話場面における中国人日本語学習者の「と思う」の習得過程の一考察：『北京日本語学習者縦断コーパス(B-JAS)』のデータから」『国立国語研究所論集』20.95-113
- 山口真葵(2023)。「中国人日本語中上級学習者の会話における誤用の傾向と振り返りの特徴に関する事例研究—授業における「モニターの観点」提示を目指して—」.『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』.15.28-36
- 楊虹(2016)。「中日接触場面の話題転換：中国語母語話者に注目して」『鹿児島県立短期大学紀要.人文・社会科学編』66.1-18
- 楊帆(2014)「中級日本語学習者の作文における困難点 一文構造の呼応関係について」.『秋田大学国際交流センター紀要』3.pp.15-28.
- 吉川武時(1997)「誤用分析 I」明治書院企画編集部(編)『日本語誤用分析』明治書院, 2-53.
- 吉永尚(2011)。「中国語話者における心理表現上の母語干渉について」.『園田学園女子大学論文集』.45
- 吉成祐子(2023)。「日本語学習者の誤用に対する気づきの視線—誤用探索課題における視線分析より—」.『岐阜大学日本語・日本文化教育センター紀要』.

〈英文〉

- Durrant, P. & Schmitt, N. (2010). Adult learners' retention of collocations from exposure. *Second Language Research*. 26(2) . 163–188.
- Schegloff, E. A., Jefferson, G. & Sacks, H. (1977). The preference for self-correction in the organization of repair in conversation. *Language*, 53(2):361-382
- Wyner, L. (2018) The development of pragmatic ability. In A.D. Cohen (Ed.), *Learning pragmatics from native and nonnative language teachers: Second Language Acquisition 123*, Bristol: Multilingual Matters. 26-56.